

善道

書
佛集
全

47
804-6

齊

俳諧資料カ一卜

年代 34化回末

編者
(筆者) 西武連中

書名 雪書集

備考

(下垣内蔵)

五道菴稱名忌

雪井集

西武連中編

西武連中編
雪井集
五道菴稱名忌



序詞

歳日在尊々〜
 降のまじり〜
 一白一とちと持〜
 昨坊と名の徳り〜
 略持田氏〜
 幻き〜
 福田の回
 福田の回

其並の官録〜
 かつ官簿の帳〜
 此の事〜
 属上侍〜
 其人の事〜
 文書と通〜
 事〜
 能籍の帳〜

弘化丁未年霜月

文政亭

專



源氏行

佛

二耕

專

魚

圃

圃

至源

二耕

專

魚

圃

圃

夕
松もけりやあふませと堀のすし
其二

松の借ものさしに牛所
川二

原さぬの光臨し松のぼり
松二

きしつゝあふませと東重
松夢

井松よあふませと西地利
松之

丁の松と毛よの松の當守
可遂

あふませ紅葉の後の月廿二
飲云

凡とのさしとあふませと
苑好

引きと繩のかりんと下せり没
文水

申の松と常よあふませと鼻杖
線路

七廻りの松とあふませと
荒川

松の松とあふませと
一水

松の松とあふませと
文忠

松の松とあふませと
醉月

松の松とあふませと
石舟

松の松とあふませと
石舟

新紫の歌を詠ふ——梅松の
地

歌よむと、實はまのち
其變

心細くもさる様のとほくと
永漢

舞のよみ——仕方あき
積出

あしあしとあふま合の歌中
隆

心細くもさる様のとほくと
旧香

おへさるまきつとつきの月
青義

勢いあふとつとつとつと
友氏

二

流るる水も——あまの
一勢

あらしのうらとつとつとつと
里凡

冬の花もあふとつとつとつと
一東

あふとつとつとつとつとつと
三川

橋のうらとつとつとつとつと
後山

あふとつとつとつとつとつと
雪隠

朝の月影もあふとつとつとつと
未庵

あふとつとつとつとつとつと
十雨

輝く心ゆくも娘の孝

清流

川と幾し一橋の城下

南川

はらの心ゆくも娘の孝

梅嶺

橋を渡る心ゆくも娘の孝

寛之

手
流の奥の心ゆくも娘の孝

茂井

流の鳥の心ゆくも娘の孝

晁高

心ゆくも娘の孝

二笑

心ゆくも娘の孝

晴山

始ては心ゆくも娘の孝

處山

子侍に侍りて心ゆくも娘の孝

数若

書くも心ゆくも娘の孝

藤凡

心ゆくも娘の孝

如翠

心ゆくも娘の孝

栞水

心ゆくも娘の孝

若水

心ゆくも娘の孝

新月

心ゆくも娘の孝

梅英

冬木之松栢栢一む

九十五

未

名録

嵩のうら一野の月や夕影のわ

東部

未庵

物に霞一松をささめ一草紅葉

新月

夕のうらね松もふよらぬお葉のうら

深秋

青嶽

降つても栢はしらばやあやめ月

伊子

まき

ちのほらさるる高傳の栢のわ

まき

傘と栢よくさる栢の吹雪のうら

花川

松原の富士とまきよさるうら

川二

冬も栢は栢もあやまのうら

松二

紅葉場むやり向く栢もあやま

栢英

冬も栢ちりく競へのお撲のうら

如翠

戸と栢もあやまのうら栢もあやま

栢

山栢ちりくあやまのうら栢もあやま

栢

栢もあやまのうら栢もあやま

かき

栢子

信とよみ平廣けりる花のら

山登

あまのつらき一日も秋とよみおくれ

梅嶺

あつたけの霞より後わきまの幸

羽尾

文水

くさくさの草もよもや楮の意

村畠

柳水

あまのつらき一日も秋とよみおくれ

塩

文水

あまのつらき一日も秋とよみおくれ

一水

あまのつらき一日も秋とよみおくれ

茂水

あまのつらき一日も秋とよみおくれ

小浜

茂水

精と秋はよむや楮もよむ

山登

山登

あまのつらき一日も秋とよみおくれ

二水

あまのつらき一日も秋とよみおくれ

晴水

あまのつらき一日も秋とよみおくれ

霞水

あまのつらき一日も秋とよみおくれ

霞水

あまのつらき一日も秋とよみおくれ

福田

一水

あまのつらき一日も秋とよみおくれ

山登

あまのつらき一日も秋とよみおくれ

如石

柳波

未及

二耕



柳波

柳波

柳波

柳波

柳波

未及

二耕

柳波

柳波

柳波

柳波

柳波

柳波

柳波

柳波

柳波

柳波

柳波

柳波

柳波

柳波

柳波

柳波

下京

柳波

柳波

柳波

柳波

柳波

あはれむ日と花酒をばしる

五

あはれむ日と花酒をばしる

花

あはれむ日と花酒をばしる

其

あはれむ日と花酒をばしる

井

あはれむ日と花酒をばしる

藤

あはれむ日と花酒をばしる

隆

あはれむ日と花酒をばしる

田

あはれむ日と花酒をばしる

氏

あはれむ日と花酒をばしる

一

あはれむ日と花酒をばしる

里

あはれむ日と花酒をばしる

の

あはれむ日と花酒をばしる

圃

あはれむ日と花酒をばしる

一

あはれむ日と花酒をばしる

雪

あはれむ日と花酒をばしる

川

あはれむ日と花酒をばしる

後

雨一由〜よまの（？）の（？）

十

体よも男女分あゝ田植う詠

聖彦



あま〜よまの牛の目尻〜朝の柔

吉見 右白坊

放れ弱伸〜止りりまもむ草

丹心

持命や〜まゝあゝりまも月と梅

葵玉

夕まや月よまよまの海〜まも

梅茂

あま〜田角の氷ま〜りま

友松

啼止〜まもま〜り〜

一止

かゝの尾と尾ま〜に懸りぬ

里抱

小ま〜ま〜り〜

浦和駅 急坂坊

龍のま〜ま〜

志芳

ね〜ま〜

夜白坊

命のま〜

一貞

行まの目延〜まの目柄〜

東忍

尊業やま〜

永珠

舟掉ノハシロシロカキル系柳

夏柳

美舟ヲカサシテハシロシロカキル系

系系

禰美カサシテハシロシロカキル系

中尾 禰美

渡美カサシテハシロシロカキル系

大田之保 渡美

橋下下ノハシロシロカキル系

倫和坊

日ノ中ハシロシロカキル系

詩目

花報ノハシロシロカキル系

雲艷

橋下下ノハシロシロカキル系

公恩

眞ノハシロシロカキル系

源花

花ノハシロシロカキル系

文雅

一ノハシロシロカキル系

大田之保 系高

喜報ノハシロシロカキル系

淳雨

橋下下ノハシロシロカキル系

戸系

舟下下ノハシロシロカキル系

化地

橋下下ノハシロシロカキル系

田舎 淳雪

備件ノ指ノハシロシロカキル系

小田之保 袁

諸國集歌

馬場の内とてきつと梅のわたり

相撞 雨の音

時とては梅の葉のつとむの音

常陸下飯 雨の音

日かきとては梅の葉のつとむの音

上総飯山 薩丹

七折のつとむの音

上総飯山 梅阿場

行状とては梅の葉のつとむの音

京 梅下場

芳野とては梅の葉のつとむの音

龜的

まきのつとむの音

中崎 羽月

花のつとむの音

下総佐倉 雪の音

陽のつとむの音

加豆場

親のつとむの音

田斐上京 吹合騒

陽のつとむの音

鹿の音

陽のつとむの音

四時歌

梅のつとむの音

上野三崎 一元

梅のつとむの音

日柳

川のつとむの音

飛湖

阿波徳守 松茂

山ナキ 淇水

栢原 把尚

土佐尾川 只限

伊野 素茂

尾道 松和

尾道 荒月

蜀阜

伊勢 二宿

九尾 梅里

佐々木 雪洞

白馬

越前福井 伸也

大津 荒徳

如削

村玉 里洞

海舟のまゝいふ中よきいふ

おのり

江柳

本うゝ〜やうし龍の油賣

替

新田川あゝいふ紅毛餅

ちん茶

茶山

おのり〜おのり〜おのり〜

雲鯨

おのり〜おのり〜おのり〜

周防柳井

三陸

夕宮の朝や西白の房牛

新旅

新〜川〜袖も〜ぬ紙えいふ

おのり

欠信

おのり〜折〜おのり〜おのり〜

回春

おのり〜中〜おのり〜

越後地

着水

馬場のまゝいふ〜又〜

おのり

見啓

階ちん〜お中〜お中〜

三上

踏行

おのり〜おのり〜おのり〜

紀伊若山

江阿坊

おのり〜おのり〜おのり〜

中和亭

おのり〜おのり〜おのり〜

美濃六井

文可坊

おのり〜おのり〜おのり〜

おのり

おのり〜おのり〜おのり〜

西阿坊

後をへつるはつらつと

海のはつらつと

松門よぬまの松と

あつらふと

つらつと

後をへつるはつらつと

つらつと

雑草

松門

あつらふ

つらつと

後をへつる

つらつと

朝よつらつと

松と

俳諧勸化帖

天の松門あつらふと

海のはつらつと

松門よぬまの松と

あつらふと

つらつと

Handwritten text in a cursive script, likely a list or account, written vertically on the left page. The text is organized into approximately 12 distinct lines, each starting with a small, consistent symbol or character. The script is dense and characteristic of historical Japanese documents.

Handwritten text in a cursive script, likely a list or account, written vertically on the right page. The text is organized into approximately 12 distinct lines, each starting with a small, consistent symbol or character. The script is dense and characteristic of historical Japanese documents.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript, spanning two pages. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and continuous across the lines, with some variations in line spacing and ink saturation. The right page shows a clear vertical crease, suggesting it was part of a bound volume. The overall appearance is that of an old, well-preserved manuscript.

Handwritten text in a cursive script, likely Persian or Urdu, consisting of approximately 10 lines of text.

